

# 乃木希典の都々逸

菊池真一

ここに記述することは新発見ではなく、事実の確認と説明補足である。

乃木希典は若い頃放蕩三昧で、柳橋・新橋・両国の料亭で豪遊したという。(注) 都々逸は飽きるほど聞いたことだろうが、自作の都々逸が若干伝えられている。

## 一 渡邊白水

渡邊白水著『乃木大将学生訓』(大正四年。銀座書房)の「乃木將軍詩歌全集」内「三狂歌及俗謡」の末尾に次のようにある。

三十八年十一月十一日法庫門陣中、將軍の誕辰祝せられし日戯れに作られたる三首  
強い自慢の髻むちやなれど死んだお方がいたはしい  
戦さにや強いが色気にや弱いそこでやつぱり唯の人

自慢話ももう聞き飽きた少しはお茶でも召し上れ

## 二 中村播五郎

これの詳しい事情が「都新聞」大正元年九月二十五日七面に「乃木大将箱入娘(思出に残る真筆の都々一)」という記事に述べられている。

俳優中村吉右衛門の秘蔵弟子に中村播五郎といふ役者あり日露戦役の当時現役の軍人として第三軍に従ひ故乃木將軍の従卒となり居たるが這般將軍の殉死を聞いて深く悲しみ曾て將軍に乞ふて秘蔵せる図の如き真筆の都々一を神前に供へ神酒を上げ當時の思ひ出でに泪ぐみながら礼拝し目下新富座へ出演中も肌身を離さず大切に扱ひ居る美談あり將軍と都々一と既に奇抜なるがこの逸話といふは実に満州法庫門に於ける將軍の  
▼誕生祝ひの日に始まれるなり時の司令部附各将校は旅順を陥れて更に奉天の大会戦に参加すべく法庫門ま

で司令部を進めて茲に機の熟するを待つべく月余の給  
与養在中廿七年十二月七日（日付ママ）は將軍の誕生  
日なればこれを祝はんとて支那家屋の大修理を行ひ特  
に將軍の居室として十疊敷程の部屋を造り土人常用の  
敷物たるアンペラへ日本の畳なりに幾筋かの縁を造り  
て四圍の壁にも紙を張りて障子になぞらへ福引やら手  
踊りやら園遊会式の模擬店もありて材料は遠く後方の  
ダルニー辺より支那馬車の鞭を鳴らさして仕入れ茲に  
全く忙中の閑宴を開く準備とゞのひたれば將軍に乞ふ  
て出席を求めたる（ママ）ば將軍は大ひに悦び諾され  
しより其当日に急造の日本間へ案内して上座に請じ兵  
卒等の仮装せる女中が配膳の段になるとその時の膳も  
木皿も総て招魂祭に用ひし木標を兵卒中の大工や建具  
屋が其形に造り箸は高梁を用ゐるなど陣中趣味溢るゝ  
ばかりなりければ將軍は案を拍つて喜ばれ支那製の大  
白を挙げて満を引き陶然として酔に入るや珍趣向の福  
引あり將軍が得たる籤は

▼旅順の箱入娘といふ題にて籤手となれる司令部附の  
一下士が大声に呼び上げるや徐々として將軍の前に配  
られしは六尺もあらんと思はるゝ缶詰箱にて製せる白  
木の白鳩が羽叩高く舞出でしと思ふ間もなく支那服を  
巧に利用して京人形に紛せる一兵卒が左手高く猪口を  
捧げて現はれ出で楚々たる裾捌優しく將軍に一盞を獻  
じたり、と見たる將軍は破顔一番大出来大出来と興じ  
盃の飛ぶに従つて戦闘中の武勇譚は四方に起りたるが

將軍は突如

▼都々逸を即吟したりと云ふより早く有合ふ唐紙を延  
べて酔余の靈筆を呵し「強い自慢の髯むちやなれど死  
んだお方が痛はしい」と認めてハハハ、誰か希望者  
は謡つて見ちや何うぢやなどの言下に某將校は直に胴  
魔声を振り絞つて怒鳴り謡へば更に將軍は「戦さにや  
強いが色気にや弱い其処でやつぱり唯の人」と即吟し  
これも待ち兼ねて咽喉仏を動かし居たる一將校の口より  
謡ひ出されたれば將軍は愈興を深うし「自慢話も最う  
聞飽きた少しはお茶でも召し上れ」と書して又これも  
満州の天に響けと謡はれたれば氣の利きたる者はソレ  
閣下がお茶を召すぞと庄搾茶を削りて湯に投じ將軍に  
進めるなど宴は夜の八時に開かれて縞烏啼き交ふ曉の  
四時に及び將軍は酔余の白髯を凍て固るばかりの風に  
吹かせて寢室に入られたり、此時播五郎は従卒として  
將軍のお世話を申上げ居れば怖づ怖づ乞ふて茲に掲ぐ  
る都々逸の書を頂戴し尚自分外に講談師の若円の二人  
へ余興の為め骨を折りし兵卒へ分配せよと百金を恵ま  
れしとぞ、播五郎は當時を偲びて涙ながらに物語りた  
り

乃木希典は都々逸を作りはしたものの、節をつけて  
唄うことは他に任せようだ。この都新聞記事の日付  
「廿七年十二月七日」は誤りと思われる。『乃木大將学

生訓』の「三十八年十一月十一日」か正しいものであらう。この記事に添えられた乃木將軍都々逸の写真は、『乃木大將学生訓』口絵に掲げられた「乃木將軍真蹟」の狂歌と書体が酷似する。

この『乃木大將学生訓』口絵の「乃木將軍真蹟」狂歌については、「都新聞」大正元年十月十八日三面に「乃木將軍の狂歌（世田谷の松蔭祭）」という記事がある。

昨日は府下世田ヶ谷村にある松蔭神社に例祭があつた早朝から陸軍經理学校、済美学校などの生徒を始め三百名ほども詰めかける朝十時といふのに齋藤社司以下本殿に神饌を捧げて祝詞を奏すると学生達は松蔭の詩歌を口々に唱へてこれに合せる、松蔭の甥吉田庫三、妹児玉よし故野村子、梅地中将、玉木少佐など順次に玉串を捧げて式を終ると社後の林で墓前祭を続け式全く終つた時に佐々木照山氏なども後れ馳せに参会する控堂には松蔭の遺物が陳列してある、その中に乃木將軍の狂歌といふものかあつた、七月二十日に作つたのださうで「さみだれに物皆くされはてやせん、ひなもみやこもかびの世の中」と半紙に書いて末に「徽、華美、国音相近し」と註が入つて居た、

この狂歌について、『乃木大將学生訓』は「乃木將軍詩歌全集」の「三狂歌及俗謡」には入れず、本文「七

節儉と質素」末尾の「かびの世の中」で次のように説明している。

出でて公事に関はる時と、退いて私家にある時とを問はず、衷心儉素を愛して喜んでこれを守つて行かれた將軍は、滔々として世の日に奢侈に流れ華美を競ふのを見て常に苦々しく思つて居られた。随つて、学生等に対しては素より、上に対しても下に対しても、人毎にこの美德を守るべきことを勸説し訓諭せられたのであつた。

これもその一つ、時は明治四十五年六月、折からの淫雨日を経て晴れやらぬ一日のことであつた。將軍は教員食堂に於て一の紙片を示された。拝受して見ると、それには

さみだれに物皆腐れはてやせん

ひなも都もかびの世の中

といふ一首の国風が記され、「徽華美音相近し」と註さへ加へられてあつた、徽と華美を両方に兼けて時弊を諷せられたのである。淫雨湿潤、何物にか徽の生じて居たのを見出されての偶成であらうが、將軍がいかにか世の輕佻にして華美に趣くのを歎き、造次にも顛沛にもこれを拯はんと志して居られたかはこれでも明かである。この歌稿、今は福井教授の家宝となつて居る。写真として巻頭に掲げたのがそれである。

福井教授とは、該書に序文を寄せた福井久蔵である。

### 三 三島通陽

三島通陽著『回想の乃木希典』（昭和四十一年。雪華社）には「乃木さんの都々逸」「乃木さんの誕生祝」という章があるが、「都新聞」大正元年九月二十五日の記事に比べると正確さに欠ける感がある。文献によつたものでなく、聞いた話だからである。

ここには先ず乃木さんの都々逸を紹介してみようと思う。都々逸と云えば、乃木さんは若い頃——結婚前は、なかなか遊んだらしく、そのほうの話は乃木さんがすっかり軍神にまつり上げられてしまつて、誰もがこのほうの話はしないので、世の中にはちつとも知らされていかない。私も知らなかつたが、先日「旅順包圍戦」〔菊池注・『旅順攻圍軍』の誤記であろう〕の著者、木村毅氏におめにかかつた時、この話をちよつと伺つて、乃木さんの人間らしさに私はかえつてなつかしくさえ思つたことであつた。成程そう云われると、乃木さんはなかなかすみにおけない所があつて、都々逸などつくるのもかえつて漢詩より上手のようだ。その乃木さん作の都々逸の中から、日清戦争の頃の作を一つ紹介してみよう。

乃木さんと旅順とは妙な因縁で、日清戦争の時も乃木さんは旅団長で、乃木旅団はこの旅順を攻めたが、その時は一兩日でこれを占領して、敵味方をアツと云わせた。その時、この戦いも終わつて先ずホツとして、次の戦いを法庫門で待機している時のことだが、乃木さんの誕生日が来た。それでその旅団では、旅団長の誕生日の祝賀会をやりたいと申し出た。すると乃木さんは、自分の誕生日なんか祝つてくれては困るとウンと云わぬ。そこで幕僚が考えて、それでは誕生日祝いということはやめにして、たまにはこんなホツとした時、兵隊を無礼講で楽しませて下さいと云うと、それならよいということでお許しが出た。そこで、兵隊は大喜びで陣中宴を張つた。そして最後に「福引き」をやつて、乃木さんが引いたものがふるつてゐる。それは「旅順の箱入娘」という題で、大きな箱に入つた人形を兵隊が二人でかついで来た。ふたをあけると、中から平和の鳩がパツと飛び出して、その中に一人の兵が京人形に扮装して入つたのが出て来て、乃木さんに盃をもつてきておしやくに来たので、兵隊達はわつと喜んだ。れ

すると乃木さんは、紙を取りよせて

「強い自慢の髯むしやなれど 死んだお方が痛ましい」

と書いた。それをノド自慢の将校がいてうまくうたつた。すると乃木さんは

「戦さは強いが色気にや弱い　そこでやつぱり唯の人」

と書いた。また散った。皆はまたドツと喜ぶ。しかし、そのうち皆があんまり武勇談に花を咲かすので、乃木さんはそれがイヤになつたらしく

「自慢ばなしももう聞きあきた　少しはお茶をめし上れ」

と都々逸にして、皆をいましめた。乃木さんは武勇談の自慢ばなしが嫌いだつた所に、その心持の一端が出ている。

## 四 桃川若燕

先の「都新聞」大正元年九月二十五日「乃木大将箱入娘」の記事が虚構でなかるうことは、桃川若燕著『乃木大将陣中珍談』（大正元年十月十八日。三芳屋書店）の次の記述によって証明される。桃川若燕こと中島留五郎は歩兵上等兵として日露戦争に参加している。

引續まして凱旋当時の珍しい御話をいたしまする、法庫門招魂祭後は十一月の十一日乃木將軍の誕生日の祝が御座ひまして、其の式場は総て支那に珍しき日本の座敷を造りました、然し之れとても贅沢なものではない、劇場の舞台と等しき物で御座ひます、日本風の

座敷を造り將軍を正座にして、自分等まで御取持ちをいたしました、其の時に集まつた方々が、閣下閣下と將軍を尊んで旅順の手柄を誉そやして居ります、將軍は御筆を執られて「今夜は皆帰さないから徹夜をして遊んでしまへ、余りお前方が俺を誉てくれるから、コンナ都々一が出来たぞ」

閣下閣下と嬉しひ話し

放しやせぬぞへ帰しやせぬ

「謡へるものがあらば唄つて見よ」

其他二三の都々一を即席にお作りになりました、自分も其の席に居つて將軍がお認めになつたを頂きました、是れは私しばかりでは御座ひません、当時中村吉右衛門君の弟子で中村播五郎君も其の時司令部に居りまして閣下の御認めに成つた都々一を貰つた筈で御座ひます。

福島成行著『乃木希典言行録』（大正二年十月十八日。内外出版協会）の次の記述は若燕自身の記述と違つたので、信用できない。

講談師桃川若燕は、一等卒として従軍し部下に在り、希典或る日若燕に向ひ、汝は或る場所に遊びに行きしやと尋ねたるに、若燕之を聞きて参り候はずと答へければ、希典は笑ひながら傍の料紙を採り、

戦さにや強いが色気は薄い、それぢやお前も唯の人  
と書し与へしと云ふ。

## 五 まとめ

以上を総合すると、確認できる乃木希典作都々逸は  
次の四首である。

強い自慢の髯むちやなれど死んだお方が痛はしい  
戦さにや強いが色気にや弱い其処でやつぱり唯の人  
自慢話も最う聞飽きた少しはお茶でも召し上れ  
閣下閣下と嬉しひ話し放しやせぬぞへ帰しやせぬ

(注)

明治十年西南戦争の後から明治二十年の独逸留学まで。  
ウイキペディア・マピオン大百科など。書物では、池  
田諭『代表的明治人 乃木希典の虚像と実像』（昭和四  
十三年。徳間書店）など。